

[生活]

飼育活動を中核とした自己効力感を高める生活科の展開

－小型動物と中型動物の同時飼育活動を通して－

清水 憲子*

1 はじめに

中央教育審議会の「生活科の現状と課題，改善の方向性」の報告¹⁾では、「自然事象に接する機会が乏しくなってきた状況を踏まえ，生命の尊さや自然事象について体験的に学習することを重視することなどが課題として挙げられている」と述べられている。また、「生命の尊さを実感させるため，動植物を自分たちで継続的に育てることを重視するなど，動植物の飼育・栽培に関する指導の充実に配慮することとしてはどうか」と改善の方向性が示されており，現在の学校教育において，動植物の飼育・栽培活動に関する指導を一層充実させていく必要があることが分かる。

自身が所属した学校や周辺の学校では，生活科の学習において，動物飼育の実践が多く行われている。これまで自身が実践してきたことや他校からの報告，先行研究から，動物の大きさによって飼育のしやすさや子どもにも与える影響などに違いがあることを認識している。これまでの実践から，中・大型動物の飼育活動では，なかなか言うことを聞かない動物を協力して飼育することによる喜びや達成感を味わえる一方で，恐怖心を感じる子どもがまったくかわることができずに，自己効力感を得ることができない様子が見られた。小型動物の飼育活動では，多くの子どもが積極的なかわりをもつことができる一方で，簡単にかかわれてしまうことで友だちと協力をして飼育できたという実感があまりもてなかった様子が見られた。また，成長の様子がとらえにくく，その成長に気付くことで充実感を得たり自己効力感を得たりすることがなかなかできない状況が見られた。

そこで，小型動物と中型動物の両方を飼育し，それぞれのよい部分を利用することで，子どもが積極的に対象にかかわることができるのではないかと考えた。そして，それぞれの動物飼育の特徴を生かしながら，同時に飼育することを可能にする学習展開を工夫することを構想した。そうすることにより，子どもは自分に合った方法で対象に向かい，自分の思いや考えを実現しやすくなり，動物飼育活動の充実が図られるのではないかと考えた。また，子ども一人一人の自己効力感を高める効果は，どちらか一方の動物飼育を行うよりも大きいと考え，活動展開の工夫を行った。

2 研究の目的と方法

生活科の目標²⁾にも示されている「自立への基礎を養う」上で大切な，「自分自身についてのイメージを深め，自分のよさや可能性に気付き，心身ともに健康でたくましい自己形成ができるようにする」ために，自己効力感が必要不可欠である。多くの成功体験を積み，自分はやればできるのだという思いをもたせることにより，自分の成長を感じ，失敗を恐れず活動したり多少の失敗にめげずに取り組んだりする子どもが育つものと考え。そのためにも，子ども自身が対象に積極的に働きかけたりかわりを深めたりする必要がある。また，適度に抵抗感があることを乗り越えさせていくことも必要である。

そこで，本研究では，先行研究をもとに小型動物と中型動物を同時に飼育する活動の実態を明らかにし，子どもが自己効力感を高めていくことにおける有効性を考察することを目的とする。具体的には，小型動物と中型動物の両方を飼育する。そして，子どもの実態や動物の特性を考慮した活動計画を作成する。活動の中で子どもが思いや願いを実現しようと積極的に動物とかかわろうとする姿や，自分自身への気付きを深めていく姿を追うために，活動毎に子どもに作文を書かせ，子どもの変容を把握し，個に応じた自己効力感を高める活動のあり方について考察する。

* 妙高市立妙高高原北小学校

3 研究の実際

(1) 先行研究より

野島³⁾は、自身の実践で考察した小型動物と大型動物の学習材としての長所・短所と、松澤の実践⁴⁾で報告された中型動物の長所・短所を、以下のようにまとめている。(表1～表3)

【表1：小型動物（ウサギ）の飼育活動の長所・短所】

<p>〈長所〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体が小さいので1年生も恐怖感なく、抱いたり、触ったりすることが容易である ・助けてやりたい・守ってあげたいという意識が育つ ・飼育環境を設定しやすい（広さや設備） ・繁殖力が旺盛で生命の誕生の感動が味わえる ・成長が短期間に観察できる 	<p>〈短所〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体が小さいので、1年生の思い通りに動かせるので、いじりすぎたり乱暴に扱われたりすることがある ・繁殖力が旺盛なので、死んでも他の、あるいは次の赤ちゃんがいるという意識をうみがちである
--	---

【表2：中型動物（ヤギ・ヒツジ）の飼育活動の長所・短所】

<p>〈長所〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の思い通りに動くことが少ないので、相手（ヤギ）の気持ちを考えて行動がとれる ・生命誕生の感動を味わうことができる ・観察する目が育ち、多角的な活動を組みやすい ・動物の提供者とのかかわりを深めたり、社会生活に気付いたりすることができる 	<p>〈短所〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・餌の量が膨大で確保することが大変である ・冬期間の預け先を確保する必要がある ・施設・設備を整える必要がある
---	---

【表3：大型動物（ポニー）の飼育活動の長所・短所】

<p>〈長所〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体が大きいので背中に乗るなどのかかわり方・触れ合い方ができる ・当番活動では友達と協力したり助け合ったりする場面が多く設定できる ・自分の思い通りに動くことが少ないので相手（ポニー）の気持ちを考えて行動がとれる ・自分より大きな相手に何かをしてあげたという充実感を味わえる 	<p>〈短所〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体が大きいので、恐怖感を抱く子どもが出てくる ・妊娠期間が長く、頻繁に産むことができないので生命誕生の場面に出会う機会が少ない ・環境を容易に設定できない（広さやしっかりした設備が必要） ・成体である場合が多いので、成長していく姿がみられない
--	---

これらの特性から、中・大型動物が怖い子どもでも恐怖感なく触ったり抱いたりでき、親しみを深める活動を構想できる小型動物として、ウサギを飼育することにした。ウサギは飼育環境が設定しやすく、子どもが生命誕生の感動や喜びを味わい生命の大切さについても実感できる場の設定が可能である。

自分の思い通りになかなかいかないものの、大型動物ほどは体が大きくないため、大型動物よりは恐怖感を抱くことが少ない中型動物として、ヤギを飼育することにした。ヤギは子どもから大人へと短期間で成長し、その様子を観察しやすい。思いや願いを実現したいという子どもは、成長に伴ってなかなか思い通りにいかなくなっていくヤギの姿から多くのことに気づき、ヤギの気持ちを考えて行動をとることができる。

この2種類の動物を飼育することのそれぞれのよさを生かして同時に飼育することで、片方の飼育だけでは大きく得られない充実感や満足感、自己効力感を得ることが可能となる。

(2) 2種類の動物の特性を生かし動物飼育活動を中核に据えた単元構想

子どもの願いを生かすことができるよう、子どもをとりまく環境、つまり校地・校舎やその周辺を「ひまわりランド」と名付け、動物飼育活動を中核に据えた単元を構想した。(図1)

構想をする上で気を付けたことは、出会いや別れの会を設定するだけでなく、動物の飼育を通して、自分ができるようになったことを発表したり、動物のことを教えたりする場を設定するようにしたことである。そうすることにより、子どもは自分の成長を感じたり、自己効力感を感じたりすることができると思ったからである。

また、動物飼育活動がその他の探検、遊び、製作、栽培活動と絡みながら継続性のある活動となるように工夫した。こうすることで、子どもと動物とのかかわりが深くなり、子どもの変容もとらえやすくなると思った。

飼育するヤギとウサギは、子どもが飼育を始めてからもかかわりをもってもらえる動物ランドから借りることにした。ヤギは、校舎に隣接した既存の大型動物飼育小屋で飼育し、ウサギは、以前小型動物用に使用されていた小屋を改造し、飼育することとした。ウサギについては、生命が誕生する可能性をもたせるために2匹飼育し、ヤギは1頭として、子どもが2種類の動物を飼育することができる状況をつくった。

飼育は当番活動にし、初めからヤギやウサギを触ることができる子どもと、ヤギを苦手とする子どもがグループになるように設定した。こうすることで、ヤギに近寄ることができない子どもも、ウサギであればえさやりやフンの始

末ができるため、自分もしっかりと当番活動ができたという満足感や自己効力感を味わうことができると考えた。

(3) 実践の実際

① ヤギ・ウサギとの出会いに期待を膨らませる子ども

1年生35名の子どもが、ヤギとウサギを「ひまわりランド」へ迎える喜びや期待を膨らませることができるように、ヤギとウサギを借りるために動物ランドへ行き、実際に動物と触れ合うことができるようにした。また、子ども自身が貸してほしいということを動物ランドの人に直接伝えることで、自分たちがしっかりと飼育していくのだという思いも強くもつことができると考えた。

子どもはヤギやウサギと触れ合い、自分たちが飼育することへの期待感を膨らませていった。しかし、柵の中にいるヤギであっても、手を伸ばして餌をあげることがこわくて泣きそうになっている子や友達に手助けをしてもらいながらおそるおそる餌を差し出す子が10人近く見られ、進んで触れ合おうとする姿になるまでには時間がかかると感じた。

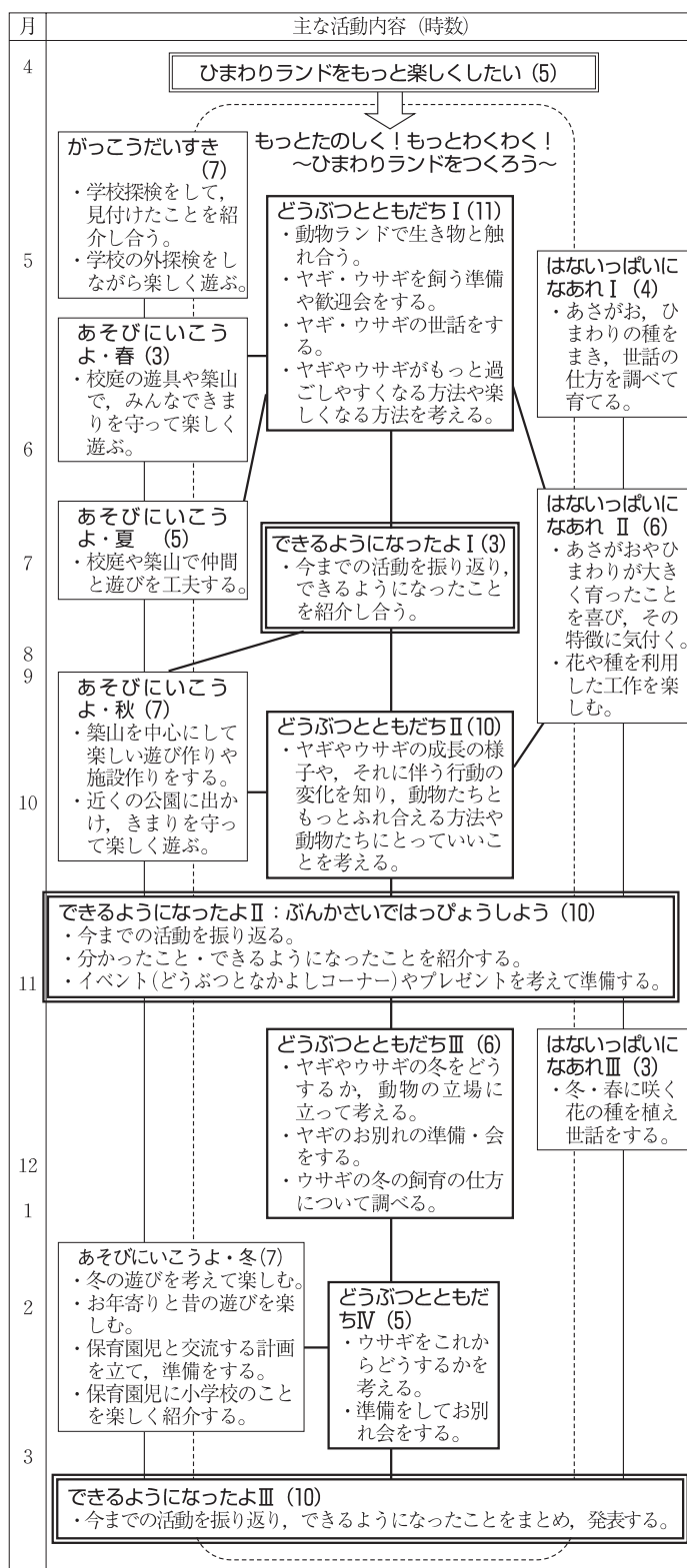
動物に喜んでもらえる企画を考えて、10日後に迎える会を行った。手綱でつながれただけで柵に入っていないヤギを目の前にして、なかなか近付こうとしない子どもが多かった。しかし、小さなウサギには「かわいい」と言いながら自ら近付いていく姿が見られ、怖がる子どもはいなかった。A子はその時のことを「ヤギがわたしを追いかけてきてびっくりしました。ウサギをなでると、毛がふわふわでした。ヤギは黒と茶色の模様が付いていました。ヤギは触れませんでした」と書いている。

② 日々の飼育活動で出てきた問題を解決していく子ども（以下、子どもの記述や実際の言動をそのまま伝えるためにヤギの名前を「マーブル」、ウサギの名前を「チョコ」「バニラ」として記述する）

ア 当番活動の中で

毎日の当番活動は、全員が何らかの形でさまざまな当番にかかわる活動を行うことができるように、4～5人1組にして1日交代で行った。マーブルが怖いA子は、「マーブルを外に出して、お願い」と、同じ班のB男に小屋からマーブルを出すことをお願いしていた。また、同じようにマーブルが怖いC子は、先に小屋に到着していても、同じ班のD男が来るまで仕事ができずに待っていた。そして、そのことを知ったD男は、C子が何も言わなくてもさっとマーブルを小屋の外につないでから掃除することが日課となった。

怖くてヤギが触れなくても仲間に助けられながら一緒に当番活動を行っているA子は、「体重測定をしたら、マーブルはたくさん増えていました。マーブルはすごいです。一生懸命お世話をしてごはんをたくさん食べて大きくなって行ってよかったです」と、マーブルの成長を喜び、日々の世話の中で自分ができる仕事を一生懸命がんばった結果としてとら



【図1：動物飼育を中核とした単元構想図】

えることができたのである。「自分はマーブルの世話ができた」と認めることができた場となった。

イ 成長に伴う動物の行動の変化から

夏休みになると、大人に成長したマーブルが子どもに突進する行動を頻繁に示すようになってきた。このことがきっかけとなり、マーブルに親しみをもって接していた他の子どもも怖がって距離を置くようになった。

そこで、動物ランドの獣医師に子どもの疑問や悩みを聞いてもらい、マーブルの成長に伴う変化やその対応について話をしてもらった。自分たちの思い通りにならないマーブルの行動は、大人になったしるしであることを知った子どもは、「ぼくたちが怖がったらマーブルはかわいそう。ひまわりランドの仲間なのに」というB男の意見に納得した。そして、「きっと餌を取られると思ったから突進したんだよ」「餌を食べているときはそっとしておいてあげよう」「でも、いけないことをしたら、だめってちゃんとしからなくちゃ」という意見を次々に出した。

マーブルの気持ちになって考えることの大切さに気付いた子どもは、後ろから近付いて餌をやらなかったことや、餌を食べているときにさわったり近付いたりしないこと、いけないことをしたときには、「だめ」と頭を押さえてしかることなどを実行していった。この話し合いの後、B男は以下のように書いた。

20さいのマーブルにはかなわないと思ったけれど、獣医さんに教えてもらったから分かりました。だからマーブルの行動に気付いて、がんばっていきたいです。マーブルがするどい目をしたたり突進してきたりしたら、様子を見て、だめって言いたいです。(B男)

さらに、このような思いはチョコとパニラを扱う際にも波及した。「抱っこばかりしていたらきつと嫌だよ」「追いかけたら怖いと思うよ」「ストレスがたまっちゃうから、抱っこはちょっとずつにしよう」と、子どもはチョコとパニラの気持ちにも寄り添うことができるようになったのである。その後、動物の気持ちに寄り添うことの大切さを学んだ子どもは、もっと動物と仲良くなりたいたいという思いを強くもつようになった。「築山でかけっこをしたい」「かくれんぼをしたい」「好きなえさをたくさんあげたい」「公園と一緒に連れて行って遊びたい」と思いがふくらみ、ヤギとウサギ両方と仲良くなることのできるような活動を展開することになった。その時の感想は以下の通りである。

- ・マーブルとかけっこをしたら転んで綱を離して、マーブルは逃げたけれど楽しかったです。仲良しになりました。うれしかったです。パニラが草ばかり食べるから、ぼくはキャベツ剣(いろいろな種類の野菜や草をキャベツでくんだ餌)を作りました。作ったらカリカリカリ食べてくれてうれしかったです。パニラととっても仲良しになりました。(B男)
- ・海洋公園に行くとき、マーブルがうんちとおしっこをいっぱいして大変でした。お掃除部隊で一生懸命掃除をしました。大変だったけど一緒に遊んで楽しかったです。(C子)
- ・かけっこをして綱を持っていたE子ちゃんが転んでかわいそうだったよ。築山から下りてきたマーブルが速かったからびっくりしました。パニラがわたしより跳ぶのが上手になったのでうれしかったです。(A子)

③ 今までの体験を生かした活動を行い自己効力感を高める子ども

ヤギとウサギの成長を受け止め、その成長に合わせた触れ合いができるようになった子どもは、自分たちができるようになったことを家の人や全校のみんなに知らせたいと考えようになった。そこで、文化祭で動物と仲良しコーナーを設けて、自分たちができるようになったことを知らせるとともに、他の人たちにも動物と触れ合う楽しさを味わってほしいという思いを実現する活動を行った(単元「できるようになったよⅡぶんかさいではっぴょうしよう」)。

「マーブルはお客さんに突進するといけないから、小屋から出さないでえさやり体験にしたらいい」「チョコとパニラの抱っこのしかたを教えることができるよ」「餌やりもさせられるね」「怖い人もいると思うから、何をしたいかを聞くといい」という意見が多く出て、今までの自分たちの体験から得たことを盛り込んだコーナーにしようとする姿が見られた。マーブルに全く触れられないF子は、チョコの担当になることで「チョコならちゃんと抱っこできるようになったから教えられるよ」と自信をもって活動に取り組んだ。同じようにマーブルは怖いけど、チョコやパニラを上手に抱けるようになってきたA子は、当然ウサギの担当になると思われたが、マーブルの担当になると言った。A子は、

動物と仲良しコーナーで、わたしはマーブルの担当をしました。最初、3人でお客さんと呼ぶとお客さんがいっぱいきてくれてうれしかったです。お客さんがマーブルを怖がっていたので、餌をあげるお手伝いをしました。マーブルはお客さんが餌をあげたとき立っていて、びっくりしました。マーブルはうれしかったのだと思います。(A子)

と当日のことを書いている。また、B男は、マーブルの扱いが得意であったが、チョコの担当に立候補した。

最初は小さい子どもがやりたいやるとしつこく言ったけれど、その子どもはぼくが上手にやったらいい子になってちゃんと抱っこができました。チョコの気持ちを考えたら、「なんか楽しくなっちゃった、もうお客さんいないのかな」と言っていたような気がしました。うれしかったことはチョコが大人気だったことです。ぼくが「また来てください」と言ったら、何と「ありがとうございました」と言ってくれたので、すごくびっくりしました。また、2年生になったら文化祭で動物と仲良しコーナーをしたいと思います。(B男)

自分がお客さんにできたことやお客さんから認めてもらえたことの喜び、自分たちの仲間の動物たちが人気であったことの喜びを素直に表現していた。成長した動物たちと同じように、自分たちもできるようになったことが増えた

という自分自身の成長を認める活動となり、「自分はやればできる」と実感できた活動でもあったと言える。そして、2種類の動物がいたことで、自信をもってかかわることができる方の担当をした子、苦手な動物でも自分ができることをしっかり行うことで自己効力感を得た子、普段あまりかかわらなかった小型動物の担当になったことで今までとは違った満足感を得た子の姿をとらえることができた。

④ 別れや新たな出会いを経て動物への思いや考えを深める子ども

ア マーブルとの別れ

冬を迎える前に、マーブルを返すか飼い続けるかを話し合った。冬という厳しい条件の下での飼育に対する子どもの不安は大きかった。そこで、獣医師からのアドバイスを聞き、冬越しできることが分かった子どもは、別れたくないから飼い続けたいという思いが大多数であった。しかし、動物ランドに戻ればお嬢さんに行くのだということを知っていた子どもは、「マーブルの幸せを考えたら、お嬢さんになってマーブルの子どもが生まれることはとってもうれしいことだから、やっぱり返したほうがいい」と自分の気持ちだけでなくマーブルの気持ちも考えて決断しようとした。そして、マーブルに対してまだ恐怖心が少し残っていたC子も、マーブルとの別れという現実と直面して、下記の記述のようにマーブルを仲間としてとらえ、自分たちと同等にマーブルの幸せを考えようとする姿に変容していったのである。

本当はマーブルを返さないほうがいいと思います。なぜかという、ひまわりランドの仲間だからです。もっと一緒にいたいんです。それからもっと遊んだり餌やりをしたいです。もっと仲良くなったりしたいです。突進してくるけれどだめだよって教えてあげたいです。でも、マーブルはけっこうんをするから返します。マーブルの幸せだからです。(C子)

イ 生と死に直面した子ども

1月、当番の子どもが慌てて駆け込んできた。チョコとバニラの赤ちゃんを見つけたのである。巣作りの兆候は見付けられず、昼休みに当番で小屋掃除をした子どもが、赤ちゃんを5匹発見した。しかし、騒いだりのぞいたりする間に、チョコは育児放棄し赤ちゃんは死んでしまった。生命誕生の喜びもつかの間、死に直面した子どものショックは大きかった。B男は、「ぼくのこころは一つしかないのに、五匹も死んだので、こころがぼくはつするほどかなしかったです」と作文シートに記し、祖父が亡くなったときのことを重ね合わせて、泣きながら悲しい気持ちを担任に訴えた。

2月、子どものもとに新たな命がやってきた。チョコとバニラの間にも再び赤ちゃんが産まれたのである。子どもの喜びはとても大きいものであった。と同時に、今度こそは大切に育てていこうという気持ちが膨らみ、のぞいたり触ったり騒いだりせず、当番のときも慎重に活動を行った。少しずつ大きくなった赤ちゃんの姿はとても愛らしく、子どもの早く触りたいという気持ちが日増しに大きくなっていった。しかし、触ってストレスになり、また死んでしまうのではないかという思いも同時に持ち合わせていた。

しばらくして、赤ちゃんを触ってもよいと子どもに告げると、歓声が上がった。しかし、「触るのは当番だけにしよう」「そうだね、ストレスで死んじゃったら大変だよ」と自分たちでルールを決めて赤ちゃんたちに接していこうと話し合うことができたのだ。死を目の当たりにしたことで様々なことを学んだ子どもは、次の新たな命に対して自分たちなりに大切にすることを決めていったのである。その後、赤ちゃんの里親探しを校内や校外（保護者に対して）で展開することを決め、赤ちゃんの幸せのために自分たちができることを実行した。見事、全ての赤ちゃんに里親が決まり、子どもは自分のことのように喜んだ。そして、このことをきっかけに、「マーブルも赤ちゃんが生まれて喜んでいね」「元気に育ってほしいね」と動物ランドに戻ったマーブルやその子どもについても思いをもつことができた。

4 考察

(1) 小型動物と中型動物の同時飼育活動のよさと困難さ

小型動物と中型動物を両方同時に飼育することで、苦手な動物がいる子どもでも、どちらか片方の動物に対する思いは高まった。そして、それだけにとどまらず、片方の動物での成功体験による自己効力感の高まりが、苦手な動物に対しても思いをよせることにつながった。そして、苦手な動物にも自らかかわろうとする姿が見られた。

本実践で、片方だけの飼育活動では得られない成功体験を含むさまざまな体験ができ、その体験から得られる、子どもの多くの思いを膨らませることにつながった。そして、中・大型動物が苦手な子どもを含む、どの子どもにも自己効力感を高める場を設けることが可能となった。自己効力感が高まったことにより、新しいことに挑戦する意欲も高まり、自分に自信をもって活動する子どもの姿につながった。

本実践から、小型動物と中型動物を両方同時に飼育するよさは、以下のような特徴としてまとめられる。

- ・中型動物（ヤギ）に対する恐怖感がある子どもは、体が小さい小型動物（ウサギ）ならば恐怖感が少ない。抱いたりさわったりするなどのかわりが可能であるため、動物を飼育することができたという実感ももてる。
- ・力づくでは動かすことができない状況が発生しやすい中型動物（ヤギ）の飼育に次第にかかわることができるようになることにより、それを子どもが自分の成長としてとらえることができる。また、動物が嫌がることなどの動物の気持ちを考えることにより、動物が喜ぶことをしてあげようとする気持ちをもつことができる。そして、その経験をもとに、扱いやすいためにかますぎたり無理に移動させたりしがちな小型動物（ウサギ）に対しても、同じような行動をとることができるようになる。つまり、中型動物飼育の長所が小型動物の短所を補完できる。
- ・小型動物（ウサギ）は、繁殖力が旺盛で出産までの期間が短いため、比較的容易に生命誕生の感動を味わうことができる。生命誕生に出会った子どもは、成長したヤギが自分の子どもをもつことに対する思いもめぐらせることができる。つまり、小型動物の長所が、今回中型動物（ヤギ）の生命誕生には出会えなかった部分を補完できる。
- ・一方の動物飼育で自己効力感を高めた子どもは、もう一方の動物飼育に対しても自らかわることができるのではないかと、自分で何かできるのではないかと考えることができるようになり、積極的な取組につながる。

しかし、「日常の当番活動の負担が増える」「餌の量や種類が増え、餌の確保が難しくなる」「2種類を飼育することができる施設・設備がどこでも整えられるわけではない」という、一種類の飼育活動よりも、その困難さが大きくなるという特徴が表れることも無視できない。したがって、その困難さを軽減させる工夫や教師の取り組み姿勢が重要である。小型動物と中型動物の同時飼育活動により先に述べたような成果が表れたことから、困難さを理解しながらも、このような実践を進めることによる教育効果を追求したい。

（2）自己効力感と小型動物・中型動物の同時飼育活動との関係

「できるようになったよⅡぶんかさいではっぴょうしよう」の単元で表れた子どもの姿は、まさに小型動物と中型動物の同時飼育活動を中核に据えた活動を仕組んだ結果である。動物と仲良しコーナーに来てくれたお客さんに対してどの子どもも主体的にかかわり、「自分はできた」という実感をもった場面である。これは、子どもが現在できることや今までの経験からできそうだと思うことを、ヤギまたはウサギのどちらかで実現できるという見通しをもてたからである。

「できるようになったよⅢ」の単元で、子どもは1年間の活動を振り返り、次のように自分の成長をとらえている。

- ・マーブルと遊んで怖かったけど、「だいじょうぶだよ」とE子ちゃんが言ってくれて、さわれるようになったよ。
- ・マーブルの秘密をさぐれてよかったです。マーブルがほかに「一緒に遊ぼう」と言っていたことです。動物とたくさん仲良くなれました。
- ・1学期マーブルがひまわりランドにやってきました。はじめは怖くて近寄れなかったけれど、2学期は怖くなくなりました。ウサギも上手に抱っこできました。あと、友達にやさしく言うと、気持ちが温かくなることが分かりました。友達のいいところを見つけたくさんできるようになりました。

中型動物が怖くて最後まで自分から近寄れなかった子どもでも、小型動物で自分から仲良くできたという成功体験を得た。動物とのかかわりを継続的に積み重ねたことが、自己効力感を高め、自分の成長を認め、友達に対する思いを深めていった。また、成功体験ばかりではなく、様々な問題に直面しながら一生懸命考え行動して自分たちなりに解決してきたことも、自己効力感の高まりに作用した。そして、自分や自分を取り巻く動物や友達の成長に気付くことにつながった。これは、小型動物と中型動物の同時飼育活動をやり遂げた子どもだからこそ得られた姿である。

5 おわりに

動物飼育活動は、思わぬハプニングを生むことが多い。それらに適切に対応しながら子どもの思いや学びの変容をしっかりととらえ、活動内容を臨機応変に修正することが大切である。また、中型動物の成長に伴い、子どもの安全面に対する配慮もしっかりと考えなければならない。今回の実践では、獣医師との連携により活動を少しずつ修正しながら進めることができたが、複数の種類の動物飼育であったことから、より綿密な連携や計画の修正が必要であると実感した。また、小型動物と中型動物を同時に飼育することは、子どもにとっても教師や保護者にとっても大きな負担となる面がある。環境整備や保護者の協力を得ることについて丁寧に行うことが必要であるので、活動のねらいや学習効果を説明できるように活動計画を吟味しながら、その教育効果についてさらに明らかにしていきたい。

〈引用・参考文献〉

- 1) 文部科学省、「中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 生活・総合的な学習の時間専門部会（第8回）議事録・配布資料 資料17」, 文部科学省ホームページ, 2006
- 2) 文部省,「小学校学習指導要領解説 生活編」, 1999
- 3) 野島聡子,「生活科における飼育動物の学習材としての有効性に関する一考察」, 教育実践研究第15集, 上越教育大学学校教育研究センター, 2005
- 4) 松澤ゆりか,「生活科における中型動物の学習材としての総合性に関する研究—第2学年におけるヒツジとヤギの飼育活動を通して—」, 教育実践研究第7集, 上越教育大学学校教育研究センター, 1997